



# お花畑の乙女

和田英子





正月松の内の六日の早朝は、粉雪がちらついていた。仔猫が出窓で目を細めて窓の外を眺めていた。春はまだ先だが、学期末試験が終われば卒業式だ。今年卒業のゼミ生たちとも、もうすぐお別れ。

ゼミでの活動は三年生、四年生の二年間。子どもと大人の狭間にいる二十歳から二十二、三歳の青年の心は、押しなべて移ろいやすく落ち着きがない。だが、今年卒業のゼミ生たちは、みんな節度もあり真面目だった。自我が強過ぎて何かと問題を起こす学生はいなかったので指導がしやすかった。さよこは、この控えめで遠慮深い学生たちが好きだった。別れがたい思いがあった。そこで、彼らに手紙を書くことにした。卒業生に手紙を書くのは今回が初めてだ。

卒業おめでとうございます。共に過またたごした二年は瞬く間に過ぎました。二年前の四月、ゼミが始まるにあたって、みなさんに心がけてほしいことがありました。日本語、英語にかかわらず、言葉をたくさん覚えること。そのためには本をたくさん読むこと。言葉遣い、礼儀作法に気を配ること。決めたことをやり遂げるようにすること。協力の大切さを覚えること。他者の痛みに敏感になること。想像力を養うこと。これらのことを、ときを選んで伝えていきたいと思っていました。そして、みなさんに対しては、できるかぎりのことをしようと思っていました。この想いを注入した風船が時空を超えて何年後かにみなさんの元に届いてくれればうれしいです。

この春、みなさんは、いよいよ、社会に旅立ちます。これまでは安全なプールで泳いでいましたが、

いよいよ、大海へ泳ぎ出す時がやってきました。大海には多くの危険が潜んでいます。どれほど注意を払っていても、海には危険な海獣がいます。空からは雨、雪、雹が降ってきます。河からは泥水も流れてきます。嵐が吹きすさび、雷が轟く日もあります。そのような状況下でも、身を安全に保ち、自分という形を崩さずに、凛々しく美しく生き抜いてほしいです。

心を美しく保つことは並大抵のことではありません。社会にはさまざまな人がいます。さまざまな意見が飛び交います。邪悪なことを考える人もいます。嫌な言葉を面と向かって投げつけてくる人や、理不尽なことを強要してくる人もいます。そんなときは、怒りと悲しみで身を震わせることもあるでしょう。何が正しいのかと思ひ悩むこともあるでしょう。それでも、やみくもに闘わないでください。自分の気持ちを整理し、きちんとした言葉で自分の考えを相手に伝える、心の余裕を持つてください。相手の言動に怒りだけで対応し敵対するのは無益なことです。辛い結果を生むだけです。しかし、平静に言葉を紡ぐのは非常に難しいです。どれほど年齢を重ねようと、経験を積もうと、なかなかできることはありません。人は、生を終えるまで発展途上であり、日々、もがき続けます。

一方で言葉ほど無力なものはありません。どれほど言葉を尽くし、誠意を尽くしても、相手の心に届かないこともあります。百人が百通りの考えを持っています。百人すべてが同じ気持ちになるのは稀なことです。立場、状況が違えば、意見が違うのは当たり前です。それでも、自分を、しっかりと保ちつつ、相手の立場や痛みを考慮する気持ちを忘れずに、美しい言葉を紡ぎ、周りの人達との対話を大切に

して生きていくことこそ、何よりも重んじられなければなりません。

私たちは、日々、自分という作品を制作しています。十年後、どのような人間になっていたいのですか。

あなた方が社会に旅立つにあたって、改めて望みたいことがあります。人生には、雨の降る日も、晴れる日もあります。さまざまなことを経験し、困難にぶつかっても、それを乗り越えていく勇氣と強さを養い、素敵な大人に成長していただくさい。仕事や勉強だけではなく、心も日々、磨き続けなければ汚れきってしまいます。大掃除を思い浮かべてください。ひどく汚れきった垢あかはなかなか落ちません。でも、毎日、少しずつでも掃除をしていると、そんなには汚れません。心も同じです。今の時代に合わないことを要求しているかも知れませんが、美しい心の大人になってほしいです。

この二年間、みなさんと過ごした日々は、私にとっても大変有意義な時間でした。伊豆での夏合宿や、即興劇のワークショップのことなど、さまざまなことが脳裏に焼きついています。私もみなさんから教わることがたくさんありました。ありがとうございました。またどこかで会える日まで、さようなら。

二〇XX年一月六日

さよこは、書き終えた手紙を読み返した。嘘偽りのない思いを綴った。つもりだ。この頃のさよこは考えていた。美しく生きることこそ、人間としての価値がある、と。ゼミ生にもそうあってほしいと本心から願っていた。「心の美しさ」に重きを置いて生きようとする人間は、社会で浮いて見えること

を知らなかった。それは、あくまでもあるべき姿にこだわる、こどもの心のままだということも、まるつきり分かっていなかった。五十路に手が届く歳になっても、夢見る少女のままのさよこには、まだまだ社会の仕組みが分かっていなかったし、周りと折り合いながら大人になっていくのだということも、とうてい理解できていなかった。自分のような考えが普通で、違う考えをする人が変わっているのだと思っていた。世間知らずにも程がある。このおめでたい女は教師ひととしての義務に雁字搦がんじがらめになり、大学教師の本分を見失いそうになっていた。

「世間の目」というものに重点を置かないためなのか、周囲の人たちの心無い声や矛盾した態度に、それなりに傷つき悩むことはあっても、自分を自省することの方に時間を費やした。そのうち、傷つき悩むことに無頓着になっていった。若い頃を感じたギザギザした怨嗟えんさはすっかり削ぎ落とした、と思っていた。人生を諦観したような気分になっていて、それを「悟り」の境地に達したのだと思いをしていた。この世は修行の場だと考えているさよこは、そろそろ、修行を終えてもいい頃だと、はき違えた結論を出していた。

「おばあちゃん、もういつ迎えに来てくれてもいいよ」

さよこは空を見上げては、亡き祖母のマサに語りかけていた。

翌朝、一月七日八時、マンションの五階に当たる裏門を左に折れ、道幅の広い蛇坂に出る。右肩にシ

ヨルダーバックを引っ掛け、左手で教科書や配布資料の印刷物でずっしりと重くなったキャリーケースを引きずり、急勾配の蛇坂をゆるゆると上っていく。昨日の晩は遅くまで手紙を書いていたので今朝は眠い。キャリーケースが転がらないように、ケースの持ち手をギュッと握りしめる。

路面は真空コンクリート舗装工法が施され、歩行者や車のための滑り止めのドーナツ形の凹みがつけられている。この凹みにキャリーケースのキャスターのはまる音と、ブーツの靴底のコンクリートを打つ音は、ジュリエット・グレコが歌うシャンソンの気だるさに似ていると、さよこは思っている。

どよんとしたトーンの背後から軽快でリズムカルな音が聞こえてくる。小学低学年らしき男子がランドセルをゆらゆら揺らしながら、さよこを追い抜き、七〇メートルほどの坂道を上りきり、突き当たりのT字路を左手に消えた。苗木のような少年のうしろ姿を、うつろな目で追いながら、さよこは大きく息を吐く。シヨルダーバックが肩に食い込み、靴の重みが足を伝わって胸のあたりまで上ってくる。口角が逆への字になる。真冬の坂道をゼイゼイ喘あえぎながら、ようやくT字路にたどり着いた。

K市の南に位置する小高い丘には、北区の「光ヶ丘公園」から西区の山里橋商店街まで一本のメイン道路が家々を左右に振り分けて走っている。くねくね蛇行しながら、長さ三五〇メートルもある「狸坂」へと、そして掘川にかかる山里橋へと下っていく。

北区の「光ヶ丘公園」から西区の「狸坂」へと走る道路の両サイドの斜面にへばりつくように、おびただ夥しい数の家々が軒を争っている。この一本のメイン道路の左右には、人が一人通れるだけの細い道が幾

筋も走っていて、上空から撮った写真を見ると、まるで百足むかでの足のようである。これらの狭い道が丘の上の住宅街と、商店が立ち並ぶ下の町を繋いでいる。

さよこのマンションがある蛇坂の途中までは道幅が広いので車が通行できる。残りの半分は道幅も狭く、傾斜もさらにきついので階段になっている。

蛇坂の右側には戸数三十戸程度の小さいマンションが二棟、左側には戸数二百四十戸の大型マンションが一棟建っている。幅の狭い階段が始まる所が、斜面に建っているさよこのマンションの五階に当たり、ここに裏門がある。玄関のある一階は、この階段を百三十段ほど下ったところにある。さよこは、裏門を使うことが多い。

やつこのことで蛇坂を上りきり、突き当りのT字路を右に折れ、メイン道路を五十メートルほど先に行った所にある「長命院」の正門をくぐる。京都の竜安寺を彷彿ほうふつとさせるほど清冽せいれつな雰囲気けいふきの境内の奥に、寺が経営する駐車場がある。駐車場に着くと、買ったばかりの中古の車の後部席にシオルダーバッグとキャスターケースを無造作に放り入れ、運転席に腰を下ろした。それから、フーツと長い溜息をついて、カーナビで行く先をセットする。職場への道は実にシンプルで迷うはずもないのに、さよこは毎回、カーナビをセットする。

前日の六日の水曜日は、朝九時から内部環境監査委員会、午後一時から教授会、午後三時から学科会



議、午後六時からは組合の会議があった。四つの会議をこなして、帰宅したのは夜九時を過ぎていた。飼猫に餌をやり、翌日の講義に備えて配布用のハンドアウトやパワーポイントのファイルを作成し、卒業生への手紙を書き、ベッドに入ったのは午前二時だった。翌朝は六時に起き、飼猫に餌をやり、簡単な朝食を済ませ、授業用の資料、テキスト、辞書、配布用のハンドアウトなどをキャスターケースに詰め込み、八時に家を出た。

一時間目が始まる五分前に教室に向かうと、学生の席は三分の二くらいしか埋まっていない。正月気分が抜け切らないのだろうか。遅刻者が多い。時間どおりに授業を始めて三十分ほど過ぎた頃、三人の女子学生が大声でおしゃべりをしながら、ドサドサと教室に入ってきた。席に着いてもおしゃべりは終わらなかった。

「その三人さん、静かにしてくださいませか」

さよこはやっぱりと注意した。一瞬、おしゃべりが止んだ。だが、すぐにまた、スイッチが入った。音量は「弱」になったものの、内容は教卓まではつきりと聞こえる。

「うっさいね」

さよこの眉間にしわが寄る。今は授業に集中しなきゃ。そう、自分に言い聞かせる。授業内容の説明は終わっていたので、学生たちにタスクを指示した。学生がタスクの内容を理解できたかを見ようと、教壇を下りて教室内を見回り始めた。と、ド派手に遅刻してきた女子たちの一人が机に突っ伏して居眠

りを始めている。

「朝一の授業で眠いのはわかるけど、このタスクは、マジ大事なのよ。だから起きて、しっかりやってください」

敢えて若者言葉を使っておどけた口調で注意した。起きる気配はない。もう一度、声をかける。微動もしない。完全無視。

「隣の方、起こしてくれませんか？」

居眠り女子の隣の席に座っている熱帯魚のような化粧の女子に声をかける。熱帯魚女子は、にやにや笑っているだけ。さよこの我慢スイッチが切り替わりそうになる。必死にこらえて、無理に笑顔を作る。

このまま放置するわけにもいかない。かといって、大仰に叱れば、どんな空気になるかはわかりきっている。居眠り女子の肩を軽くつついてみる。一向に起きる気配はない。

「しょうがないわね」

さよこは苦笑いで教壇に戻った。しばらくすると、居眠り女子は万歳の格好で上体を起こした。その様子を見てみると、胸の奥でカラカラと音がする。空しくなってくる。目を横の方に向けると、熱帯魚女子の隣の女子が、両手をもそもそ動かしている。

学生の各机に取り付けられたパソコンとパソコンの間の隙間を、教壇から、ぐいと首を伸ばして覗いてみる。机の上に折りたたみの鏡を立て、まつ毛のカーラーをカーラーで整えているらしい。机には化粧

ポーチからはみ出た口紅が転がっている。語学授業のためのCALL教室には、各机にパソコンと教卓のパソコン画面を映し出すモニターが取り付けられているので、それが目隠しになって、学生の行動が教卓からは見えづらい。それをいいことに一部の学生は授業などそちのけで好き勝手なことをしている。さよこの脳内の我慢度計の針が大きく揺れた。さよこは、ガタッと、音を立てて椅子から立ち上がった。

「何をしてるんですか？ 授業中ですよ」

ドスのきいた声に教室がしーんと静まり返った。それでも、化粧女子は悪びれた様子もない。

「えっ？ ああ、はいはい、今忙しいから」

教卓にいるさよこの方向に向かって、ハエや蚊でも追い払うような手つきをすると、直ぐにまたまつ毛のチェックに戻った。

「化粧道具を早く片付けなさい。授業中です」

思わず、上ずった声になる。「おさえて、おさえて」もう一人のさよこが爆発寸前の気持ちを静めようとする。当の化粧女子は注意されても、まったく意に閑せずで、化粧を続けている。教師など眼中にないようだ。そのふてぶてしさに、とうとう、さよこの我慢度スイッチが切り替わった。

「あなたたち、三人とも出て行きなさいっ」

自分の声の荒々しさに勢いづいて、怒りスイッチが「強」に変わった。

「さっさと、出て行きなさいっ」

他の学生たちは冷凍庫の冷凍野菜のようにカチカチに固まっている。三人の顔がゆがみ、いっせいにさよこの方をキッと睨みつける。

「ちっ、うっせーな」

化粧女子が舌打ちする。居眠り女子と熱帯魚女子は荷物を抱<sup>か</sup>えてスタスタと教室を出て行った。元々、テキストも筆記道具も出していないので動きは素早い。まつ毛チェック女子も、すぐに、二人の後を追おうとしたが、気が動転して手が震え、鏡も口紅もまつ毛カラーもポーチも全部、床に転がってしまった。それらを拾い集めようとして、隣の席の男子の椅子に足が絡まってしまい、男子の肩におおいかぶさるように倒れ込んだ。周りの学生たちの冷ややかな視線を感じてか、捨て鉢になった、まつ毛チェック女子は、遠くまで転がった口紅を諦めて、かき集めた化粧道具をトートバッグにバッサ、バッサと突っ込み、男子学生に謝りもしないで出口に突進してドアを叩きつけるように閉めた。ボタンという音とともに、出ていく間際に吐いたヒステリックな声が宙に浮いた。

「クソババア、教育委員会に訴えてやるっ」

この日の最後の授業を終えたのは五時五十分。さよこは、明日の「イギリス文学史入門」の講義のためのハンドアウト二〇〇部をコピー機で印刷してから、七時に研究室を出た。出版社から送られてきた

英語教科書の見本も加わり、朝よりもさらにパンパンに膨らんだキャリーケースを車に押し込んだ。

キャンパスから三十分ほど走ったところで、今朝の授業の記憶がよみがえってきた。胸がチクチクする。四時限目の授業が終わるまでは、目の前の授業に集中しよう。そう心に決めていた。ところが今、まるで待ち構えていたかのように、あの滑稽でやるせない場面が頭に浮かぶ。胸の奥のすすり泣きが表に漏れてくる。

「どうして教師になんかたんだらう」

そんな思いが胸をよぎる。週に四日、大学と自宅を往復するだけの凡庸で単調な生活が空しく思えてくる。週に一度の研究日ですら、授業準備以外にも会議に関する諸々の仕事に追われる。研究はおろか、自分のことで思い煩<sup>わづら</sup>う時間もない。唯一、心の整理ができるのは、自宅と大学を往復する車の中だけだ。さよこが人に物を教える職に就いてから二十年以上経つ。その間、時代も移り、学生の気質もずいぶん変わった。昔だつて生意気な学生はいたが、わけの分からない悪態をつく学生はいなかった。「クソババア」という言葉は反抗期の少年少女が母親に向かって吐く言葉だと思っていた。

大学院を出たばかりの頃は、複数の大学で非常勤をしていた。仕事が楽しくて仕方がなかった。若かったし、時代もまだバブル崩壊の前で明るかった。どこの大学でも、さよこは学生たちと気が合った。彼らは悩みごとをいろいろ持ち掛けてきた。性別違和に悩む学生の相談にも乗った。学生たちといると

心が弾はずんだ。授業の後、近くの喫茶店で学生たちとおしゃべりすることも度々あった。だが、本務校として、この大学に赴任してから、学生のことでもやややした気分になることが多くなった。口に入れたガムに砂が混じっている感覚だ。口を動かすたびにジャリジャリと音がする。

それまで教師として体験したことのないことが度々起こった。大学祭でゼミ活動の展示の手伝いをしてくれたゼミ生たちに、お疲れ様の気持ちで、ピザをご馳走することにした。ゼミ生の一人の男子学生に「ピザ屋さんが来たら支払ってね」と、一万円札を預けた。お釣りがやけに少なかった。「領収書は？」と、たずねると、長い間があつてから、「もらうのを忘れました」という答えが返ってきた。さよこは、なんとなくもやややした感情を捨て切れなかった。次の学年のゼミ生に立て替えた合宿費がまだ返ってこないことも心に引つかかっていた。

その後、この学生たちは、さよこの思いをよそに、平然と、ゼミの授業に顔を出した。ああ、やっぱり。平田君は本当のことを言っていたんだ。秋山君はいつか払ってくれるんだろう、と自分に言い聞かせた。そう考える時点で、さよこの方が、大人の狡猾さを知らない子どものままだった。

怒りが表面に現れない。怒りよりも、胸の奥に居座る悲しみが顔を出す。ただ、悲しい。学生たちを正しい道に導かなければいけないことはわかっている。教師として、凜とした態度で臨まなければならぬのだ。「あなたの行為は間違っています」と、正さなければならぬのだ。しかし、お金に係ることだ。非常に難しい。匙さじ加減かげんを間違えると、とんでもないことになる。大問題に発展しかねない。ここは

祖母の教えの「隠忍自重」方式に従うしかない。だが、何ごともなかったかのように振る舞う、自分の情け無さに腹が立つ。学生を正しい道に導くという教師としての役目を怠っている。このまま社会に送り出してはいけけないのに。時代によって変わる文部科学省の教育方針がうまく機能しなかったのだと結論づけたくなかったが、ここ数年で学生の気質は一八〇度転換してしまったように思える。それは仕方がないことだと、うやむやにしてしまう自分が情けなかった。

中学一年生の秋の放課後、さよこは図書館で本を読んでいた。先輩の二年生の女子たちが本棚の前で、大声で話し始めた。読んでいた本の内容が頭に入らない。我慢が足りなくなつて、そつと言つてみた。「すみません、ちょっと静かにしてもらえますか」

平素は無口なくせに、いざとなると、結構はつきりものを言う子だった。

それ以来、その女子たちと廊下ですれ違う度に言われた。「すみません、静かにしてもらえますか」その後は、キャツ、キャツと笑う声が長いこと続く。毎回、胸がちくちくした。今のイジメというほどのことではないが、なんとも気が滅入ることだった。何か言い返したくなる。そのことを祖母にブウたれると、祖母が言うのだ。

「何もしたらあかんよ。隠忍自重やで。我慢しいや」

この頃から、どれほど理不尽な言動をされても、黙って胸の奥にしまい込む癖がついた。

正月松の内の七日、午後七時。日はとっぷり暮れて、街並みは暗く沈んでいた。さよこは前方に注意しながら慎重に運転していたが、思いは再び今朝の授業に戻った。胸が疼く。もっと冷静に対処すべきだったのかも。隠忍自重が足りなかったのかも。授業で学生を叱った後はいつものように自問自答する。あれでよかったのか。他のやり方があったのではないか。いや、今日は、あれでよかったのだ。あの状況で甘々しい態度をとっていれば、他の学生たちに示しがつかない。二十年前なら、授業中に化粧をする学生などいなかった。大教室では、教師の目を盗んで手紙を書いている女子学生はいたけれど。場所も弁えずわきまに気分の赴おもむくままにふるまう学生。己の心をコントロールする制御装置が機能していない学生。ルールに反した行為を注意されると、「うざい」の一言で片づける学生。彼らからすれば、注意する教師の方が空気を読めないのだ。そう考える「俺さま」的な学生が増えた。さよこは、もやもやしていた感情が徐々に怒りに変じるのを静かに受けとめた。

十五年も前に他大学で非常勤講師をしていた頃、ある初老の先生が言った。

「馬を水飲み場に連れて行っても水を飲ませることはできないという諺がありますけどね。今の学生は水飲み場に連れて行くことが難しいですねえ」

頭髮に白いものが混じり始めた先生は上品な顔立ちに辛そうな表情を浮かべた。当ても確かにその通りだと思ったが、今日ほど、身に染みて感じたことはない。



さよこは、教師になろうという固い決意をしていたわけじゃなかった。祖父も母も二人の伯父たちも教師という境遇に育ったためか、いつのまにか、この道を歩いていた。英文科の大学院を出た後、諸先輩たちから非常勤講師の声がかかった。ありがたくお受けしていくうちに、四校の大学で週に十三コマの授業を受け持つようになっていた。

仲間の非常勤講師たちは、せっせと専任講師の公募に応募していた。一つの職に二、三百人が応募するのだから、かなりの狭き門である。百校くらいの大学の公募に応募するのはいたって普通のことだと、仲間の一人が言っていた。

さよこは、公募に関しては消極的だった。公募に挑戦する気力がなかったし、自分をアピールするだけの自信もなかった。

四つの大学で週に十三コマ。もうそれだけで十分だし、精いっぱいだった。英文科を出た非常勤講師の担当科目は、たいてい、英語だった。英米演劇専攻のさよこも十三コマすべて、英語担当だった。要領の良い人は、どこの大学でも毎年同じ教科書を使い回していたが、要領の悪いさよこは、学生の学力に合わせて、毎年、十三コマすべてで違う教科書を使用した。そうすると、当然、毎日、授業準備に追われる羽目になる。論文を作成する時間を十分取れない。

夏休みなどの長期間の休みでないと、なかなか腰を据えて論文に取り組むことができなかった。国内外の学会で発表した原稿をさらに深く掘り下げて書き直したものを、学会誌に応募する。査定に合格す

れば、その論文を掲載してもらえない。業績書にも加えることができる。さよこの場合は、当時、一年半に一本書ければ上出来だったので、業績の欄はちよっぴり淋しかった。だから、公募に応募する勇氣はなかった。関心がないのではない。とにかく、何をやらせても要領が悪すぎた。

本人は、目の前の利益よりも長い目で人生を眺めたいなどと、嘯ヒソヒソいていたが、つまるところは、ハードな論文作成から目を背けたかっただけの、ものぐさの言い分にすぎなかったのだ。

それでも、いくつかの大学で教えている間に、いろいろな大学の先生方に顔を覚えてもらうようになり、「真面目の国の真面目な人」と、真面目さを買われて常勤の口がかかった。

人にものを教える仕事为天職だとは思わないが、自分に合わない仕事だとも思っていないかった。教えることに喜びを感じるようになってきた頃には、教師のプロを目指そうと考えた。さよこが目指すのは、研究業績だけが立派な教師ではなかった。現時点で成績がふるわなくてもいい。知識を積み重ねていくことの喜びを知ってもらいたい。そう思ってもらえるような授業がしたい。そう考えていた。さらには、大空に羽ばたくだけの強い翼を持たない学生には、彼らの心の支えになりたい。この二つが教育に携わる者の義務だし、プロのすることだと考えていた。

こちらの思いは、なかなか学生には伝わらない。一方通行の恋に似ている。そんなことを考えていたら、二年前に卒業した男子学生のことを思い出した。そう言えば、秋山君から妙なメールが何通か送られてきていた。メールの内容を思い出して、さよこの口から、思わず笑いが漏れた。メールを受け取っ

たのは秋山君が卒業する前の年の初夏だった。

「前期も終わりに近づいたので、伝えたいことがあります」から始まるメールは、たどたどしい表現が多く、何度か読み返さないと、何が言いたいのか、話の趣旨がよく分からなかった。三度目にやっと言いたいことが見えてきた。要は二つ。一つは、就職活動でうまくいかないのは、授業が役に立たなかったからで、今後一切授業に出ない。退学しても構わない。もう一つはさよこへのクレームだった。クレームは「この前、先生が話していた中に、由々しき考え違いを感じました」から始まった。さよこは、就職活動が上手くいかないと肩を落としている秋山君にアドバイスしたことも、その内容はつきり覚えてる。

「若い時に少々失敗しても、それは将来のための勉強だからめげることはない。ずっと先に幸運が待っていることもある」と、アドバイスした。彼はこのアドバイスが気に入らなかつたようだ。さよこの言葉は鵜呑みできない。『フォレストガンプ』は映画だから感動するが、世の中というものは、正と負、表と裏があるから、同時に不幸にも怯えなければならぬ。マイナスという言葉を知らない小学生には良いかも知れないが、そうでない人には今後一切、そのような言葉を口にしない。そういうクレームだった。

メールを読んで、さよこは「またか」と、思った。新学期が始まって間もない頃にも、彼からわけの

分からないメールが届いていた。そのときは、変わった子だと、やり過ぎした。本格的に就職活動が始まった頃、彼が何食わぬ顔で研究室を訪れ、アドバイスを求めてきたとき、さよこはメールのことはすっかり忘れて、親身に相談に乗り、励ました。その真剣なアドバイスに対する反応がこれなのか。さよこは、がっくりと肩を落とした。前向きな姿勢のどこがいけないのか。言葉が足りなかったのか。自分の言動をいろいろ思い起こしてみるが、理由がわからない。

さよこは、いつだって、学生の相談には真剣に誠実に対応してきたつもりだ。その直線的な姿勢を、シニカルに捉えられ、クレームをつけられた。胸に百本の針を立てられたような気がした。

就職活動の度重なる失敗に気が立つのは分かるが、その鬱積した感情を、駄々子のようにぶつけられても、どう対処してよいか分からない。さよこは絶句するだけだった。そう言えば、立て替えた合宿費を、まだもらっていない。

笠間街道を東へ七キロほど走って、山里橋に差し掛かったとき、ハンドルを握る手に力が入った。

「あっ」 さよこは思わず声を上げた。あの子は心を病んでいたんだ。あの子は、真っ黒に塗りつぶされた一枚の絵の世界をさまよっていたんだ。その絵の上に、何度明るい色を塗り重ねようとも、結局、ドス黒い絵になるだけだ。どれほど努力しても報われないのだから、明るい未来を描くことなどできやうはずがない。彼は、そういう所まで思い詰められていたのだ。

さよこは、秋山君のことを、変わった子、我儘な子と決めつけて、逃げた。面倒なことに巻き込まれなくなかった。正面から、きちんと向き合うべきだった。でも、あの頃はわたしだって、仕事で疲れきっていたんだもの。

言い訳するさよこに、もう一人のさよこが問い詰める。

「強い翼をもたない学生の心の支えになりたかったんじゃないなかったの」

はなばたけ おとめ  
お花畑の乙女

2023 年 10 月 28 日 発行

著者 わだえいこ  
和田英子

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、



---

粉雪がちらつく正月松  
の内。とある大学で教鞭  
をとる「さよこ」は、ゼ  
ミ生への手紙を綴ってい  
た。時にままならない思  
いを抱えながら働く彼女  
の、教員生活を描いたお  
話。

---

